

鈴木胤『雅語訳解』の刊行年について

湯 浅 茂 雄

鈴木胤（宝暦十四年～天保八年）は、尾張に生まれ、長じて儒学者として名があつたが、早くから宣長の著作を通じて国学に強い関心を持ち、二十九歳で宣長門に入り、晩年には尾張藩藩校の明倫堂で国学を教授した人物である。

国語学史上の主著としては、活用研究に関する『活語断続譜』（享和三年頃成）、国語をその機能から「体ノ詞」「用ノ詞（作用ノ詞・形状ノ詞）」「テニヲハ」に分類する論を展開する『言語四種論』（文政七年）、国語の起源に関する『雅語音声考』（文化十三）があげられる。これらは国語学史の単著として最初のものといわれる保科孝一『国語学小史』（明治三十二年）を初めとして、諸氏の『国語学史』で必ず取り上げられるものである。

本稿で取り上げる『雅語訳解』は辞書体をなすもので、『源

氏物語』など中古語を中心とする「雅語」をイロハ順で見出し語に掲げ、その意味に相当する当時の俗語を対応させ（「訳」、必要に応じて解説を加える（「解」）ものである（写真3 文政三年板 一丁ウ・二丁オ 参照）。雅語に対する俗語の当て方や解説、また取り上げられた見出し語（「雅語」）の質などから、鈴木胤の雅語意識や具体的な学説が知られる点で、国語学史の資料であると同時に、訳として採用された俗語から当時の話し言葉の様子が知られる点で、国語史の資料ともなるものとして興味深い資料である。筆者もこの点に注目して俗語索引を作成し、また、いくつかの論をなしたことがある。主著に比べて『国語学史』等で詳説されることは少ないものの、鈴木胤の著作としてよく知られているものの一つである。

本稿では本書の刊行年の問題を取り上げる。従来、本書の刊行年は文政四年（一八二一年）とされてきたが、文政三年（一八二〇年）とすべきことを述べるものである。

『雅語訳解』の刊行年については、諸氏による『国語学史』や国語・国文学に関する辞典・事典類が、必ずしも『雅語訳解』を取り上げるわけではなく、また取り上げていても、業績として書名を掲げるのみなど、言及の程度が異なるので、刊行年に触れるものは意外に少ないが、刊行年に言及するものは、後述する湯浅の言及と、馬淵和夫・出雲朝子『国語学史』の一書を除いて、すべて文政四年とする。

具体的には『国語学史』では、重松信弘『国語学史概説』（昭和十四年十月）が文政四年刊とする早い時期のものであるが、三木幸信・福永静哉『国語学史』（昭和四十一年六月 風間書房）も同様であり、鈴木康順彰会編の『鈴木康百三十年記念』（昭和四十二年九月）中、岡田稔編「新修鈴木康年譜」の文政四年の項にも「雅語訳解」刊とある。さらに『雅語訳解』を含む一九種の雅俗対訳辞書類を資料群と捉えて考察を加えた福島邦道「雅俗対訳辞書の発達」（『実践女子大学文学部紀要』十二 昭和四十四年）も刊行を文政四年とする。以下、古田東朔・築島裕『国語学史』（昭和四十七年十一月 東京大学出版会）、国語學懇話會編『国語學論考及び資料』（昭和五十八年五月 和泉書院 榊原邦彦「雅

語訳解本文及び索引」解説）、『日本古典文学大辞典』（昭和五十八年十月 岩波書店「雅語訳解」の項、福島邦道氏執筆）、建部一男『近世日本文法研究史論』（昭和六十一年二月 双文社）、近年の事典類では『日本語大事典 上・下』（平成二十六年十一月 朝倉書店「雅語訳解」の項、内田宗一氏執筆）も同様である。

筆者も『雅語訳解』を取り上げた論文を執筆した当時（昭和六十三年〜平成三年）は、架蔵本も文政四年の奥付を持つもの（写真6 参照）であったことから、刊行年を疑うには至らなかった。右の国語學懇話會編『国語學論考及び資料』で、榊原邦彦氏が御所蔵の本を影印された『雅語訳解』も筆者架蔵本（写真5〜写真6）と同一のものである。

その後、名古屋の古書店で、奥付および板元の異なる『雅語訳解』（写真1〜写真4参照、内容は文政四年板と同一）を入手したことから、本書の刊行年を文政三年とすべきであると考えるに至った。本書は文政四年板に比して判型が僅かに大きく（文政三年板、縦16.0cm×横11.2cmに対して文政四年板は縦15.2cm×横10.9cm）、また、文政三年板には見返しが無い（写真2参照）。奥付には「文政三庚辰春新刻、尾張書林 松屋善兵衛 朱印（昭華堂記）」（写真4参照）とある。

筆者は、この文政三年板を入手後、西崎享編『日本古辞

書を学ぶ人のために」(平成七年五月 世界思想社)「補説 江戸時代の辞書」における『雅語訳解』の解説において、以下の様に言及したことがある。馬淵和夫・出雲朝子『国語学史』(平成十一年一月 笠間書院)が文政三年刊とするのは、これを踏まえていただいた結果かもしれない。

筆者の架蔵する一本の奥付は「文政三庚辰春新刻」であり、『古典籍総合目録』(岩波書店)の「雅語訳解」の項にも「文政三版―熱田菊田(一冊)」とある。これらの刊記をそのまま受け取れば、刊行は文政三年となる。(同書 二四二頁)

解説に用いた写真版も、架蔵の文政三年板によって載せていたが、紙幅の関係上、奥付の写真版を示すことはできなかった。また『古典籍総合目録』で唯一「文政三板」とある熱田神宮菊田文庫本も当時は未見であったため、上述の記述にとどめていたものである。本年三月、熱田神宮菊田文庫を訪れ、『古典籍総合目録』(文政三版―熱田菊田(一冊))が、筆者架蔵の文政三年板と同板であることを確認した(菊田文庫は複写、写真撮影は一切不可である)。なお『雅語訳解』の所在は、現在、国文学研究資料館の日本古典籍データベースで四九件、コーニツキー版・欧州所在日本古典籍総合目録で四件の所在が確認出来るが、文政三年板を所蔵するのは、やはり熱田神宮菊田文庫のみという結果にな

る。現存する『雅語訳解』の刊本では、写真6のように「文政四年春」書林、京都寺町通五條上ル 天王寺屋市郎兵衛、尾州名古屋本町拾丁目 美濃屋清七、同本町拾一丁目 萬屋東平」がほとんどであることから、これまで文政四年刊とされたのであろうが、文政三年板は稀少ではあるものの、架蔵本を含め二本が確認できることから、『雅語訳解』の刊行年は文政三年とすべきである。なお、盛岡市中央公民館が蔵する『雅語訳解』は、刊本からの写本であるが、巻末に「文政三庚辰春新刻 尾張書林 松屋善兵衛」と写されていて、文政三年板の存在を裏付けるものである。国語学史上、一年の差であっても、学説上の前後関係が問題となることもあり、揺るがせにできない問題である。

文政三年板の板元の松屋善兵衛は、「江戸時代尾州書林書肆別出版書目集覧」²⁾によれば、尾張の書肆として安永九年から天保十五年までの出版物が確認でき、特に文化文政期に活発な出版活動を行なっている。屋号は「昭華堂」、住所は「名古屋本町拾丁目」である。文政三年板は松屋善兵衛一書肆による、いわゆる丸株での出版であったが、文政四年板では京都の一書肆、尾張の二書肆による相合(あいあい)板であり、板権が譲渡されたようである。

この様な相合板の観点から「日本古典籍データベース」四九件の奥付を検すると、文政四年板にはもう一種の板本

が存することに気づく。例えば、富山市立図書館山田孝雄文庫本の書誌情報に「文政四年春／書林／京都寺町通五條上ル 天王寺屋市郎兵衛／同 天王寺屋嘉兵衛／尾州名古屋本町拾丁目 松屋善兵衛〔板元印あり〕」とある相合板である。この他、小浜市立図書館（山岸家旧蔵）本、中京大学図書館本、新潟大学佐野文庫本、龍谷大学図書館写字台文庫本なども同種のものであろう。

すなわち『雅語訳解』は「文政三庚辰春新刻／尾張書林 松屋善兵衛 朱印（昭華堂記）」の奥付を持つ文政三年板と、文政四年板には二種あり、一つは「文政四年春／書林／京都寺町通五條上ル 天王寺屋市郎兵衛／同 天王寺屋嘉兵衛／尾州名古屋本町拾丁目 松屋善兵衛〔板元印あり〕」の奥付を持つもの（文政四年板甲種）、もう一つは「文政四年春／書林／京都寺町通五條上ル 天王寺屋市郎兵衛／尾州名古屋本町拾丁目 美濃屋清七／同本町拾一丁目 萬屋東平」の奥付を持つもの（文政四年板乙種）であり、この順に刊行されたものと考えられるのである。

『雅語訳解』の刊行年と板種について以上のように考えるものであるが、問題点が二つある。一つは、文政三年板の「文政三庚辰春新刻」は、市岡猛彦による序文、「時は文政三年の夏 かくしかくするすはをはり人市岡たけ彦」（傍線は筆者）の記述に矛盾する点である。いま一つは、

最も多くの板が残る文政四年板乙種の奥付で、書肆の美濃屋清七の住所「尾州名古屋本町拾丁目」が、同時期の松屋善兵衛と同一である点に疑問が残る。この美濃屋清七は「江戸時代尾州書林書肆別出版書目集覧」によっても、住所は「名古屋本町十丁目」とされるが、出版物によっては「尾州名古屋伝馬町」とされることもある書肆である。これらをどう考えるかであるが、今後の課題としたい。

最後に文政三年板の巻末の「近刻書目」（写真4参照、文政四年板も同一内容）に触れておきたい。

『雅語訳解拾遺』・『玉小櫛補遺』（源氏物語玉の小櫛補遺）・『言語四種論』・『離屋学訓』・『校異土佐日記』（加藤磯足『校註土佐日記』）・『同追考』（市岡猛彦『校註土佐のき追考』）・『塩尻蚕柁繩』

（括弧内は現在刊本として確認出来る書名）以上の七種（『雅語訳解拾遺』は出版には至らなかった）が挙げられている。「近刊書目」は広告であるので、松屋善兵衛がこれらの書目の出版に何らかの形で関わったか、その計画があったと考えられる。しかし、この七種の内、現存の板本（国文学研究資料館の日本古典籍データベース）で奥付に書肆松屋善兵衛の名が確認出来るのは、加藤磯足『校註土佐日記』（文政三年）のみである。京都・大坂・江戸・尾張の四都四書肆の相合板として、松屋善兵衛が最後

に名を連ねる。また『玉小櫛補遺』（『源氏物語玉の小櫛補遺』）は鈴木胤の蔵板（尾張 波奈例屋蔵板）としての出版で「文政三年庚辰新刻」とあり、書肆名は記されていない。製本を請負ったとも考えられる。この他はいずれも、現存の板本からは松屋善兵衛との関わりは確認できない。

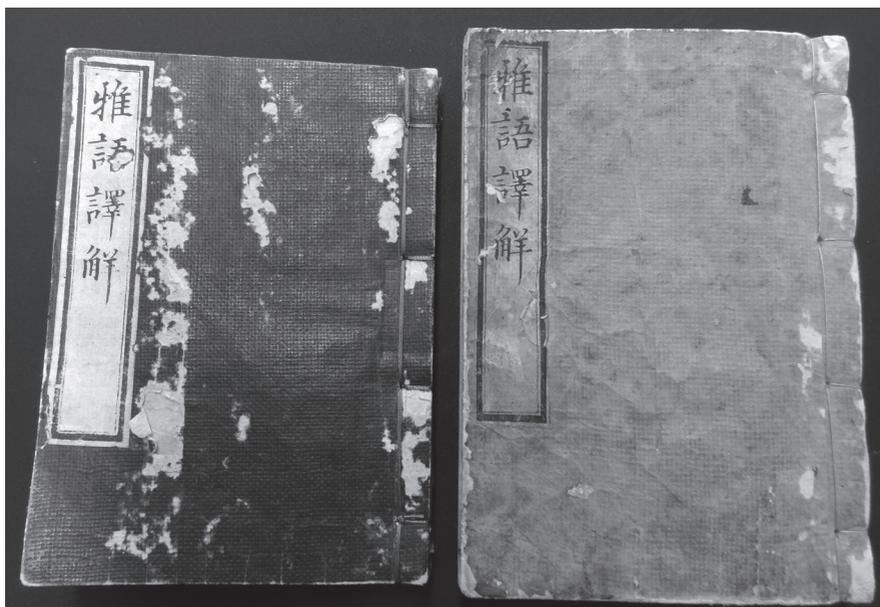
松屋善兵衛は、その「近刻書目」で鈴木胤に関わる四種の著作の出版広告を出していることから、一時期、鈴木胤と関係があったと考えられるが、現存する板本からはその痕跡は見出せない。『雅語訳解』文政三年板が現存していなければ、鈴木胤の著作との関係は見えない。松屋善兵衛とその周辺書肆の関係、鈴木胤との関係をさらに調査する必要があると考えるが、これもすべて今後の課題としたい。

注

- 〔1〕湯浅茂雄「鈴木胤『雅語訳解』俗語自立語索引（ア～タ行）」
（『ノートルダム清心女子大学紀要 国語国文学編』一二二
巻一号 昭和六十三年三月）、同「鈴木胤『雅語訳解』
俗語自立語索引（ナ～ワ行）」（『ノートルダム清心女子大
学国語国文学科『古典研究』一五号 昭和六十三年三月）、
同「雅俗対訳辞書類の俗語の性格―鈴木胤『雅語訳解』
を資料として―」（『国語語彙史の研究』九 昭和六十三年十一月 和泉書院）、同「国語資料として『雅語訳解』

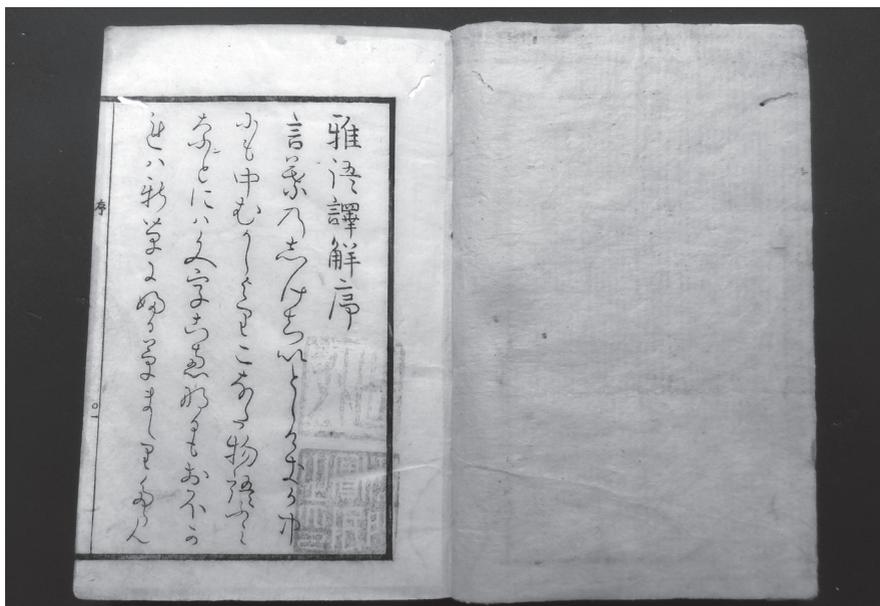
- （『文莫』一六 平成三年七月）、同「雅俗対訳資料における俗語の共通的性格」（森岡健二編『近代語の成立―文体編―』所収 平成三年十月 明治書院）、同「雅俗対訳資料と語彙研究―『雅語訳解』『古言訳解』を資料として―」（『日本近代語研究 1』所収 平成三年十月 ひつじ書房）
- 〔2〕岸雅裕『尾張の書林と出版』（『日本書誌学体系』八二 平成十一年一〇月）

（ゆあさ しげお・実践女子大学教授）

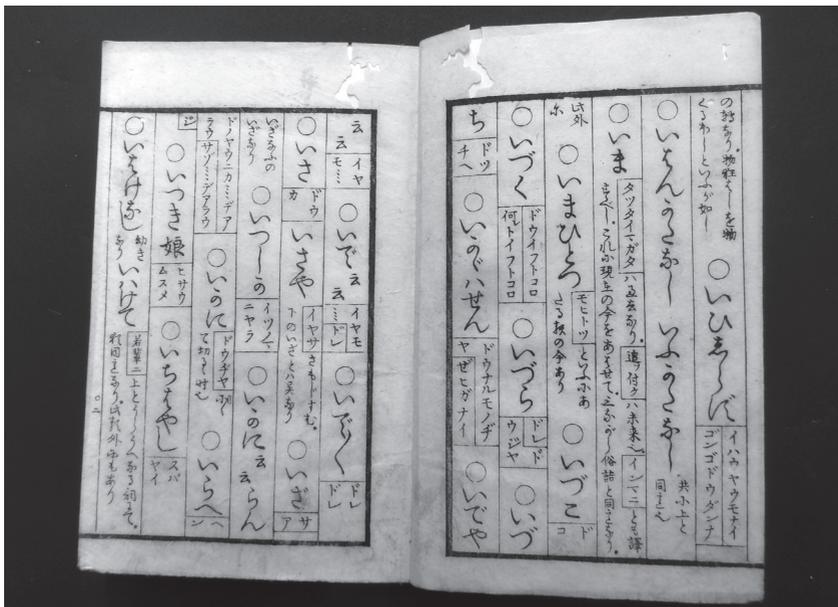


【写真1】 文政四年板

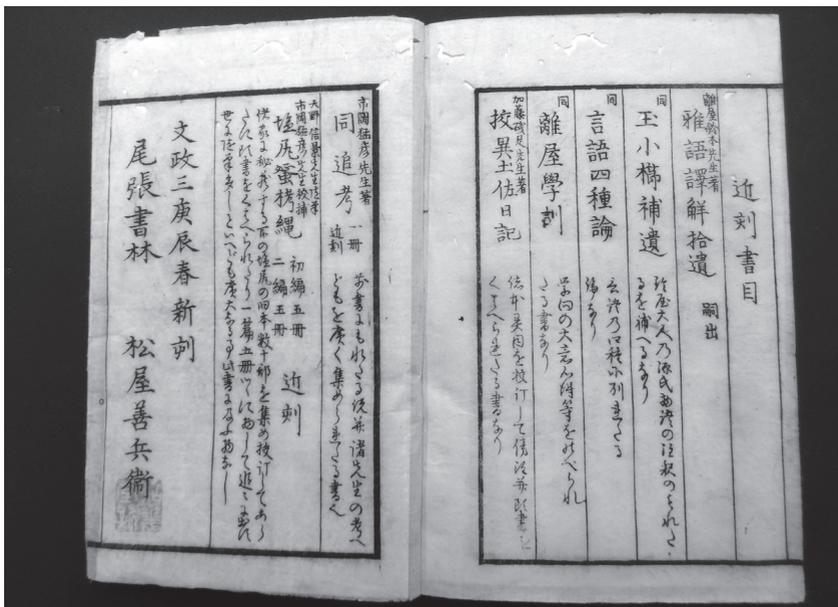
文政三年板



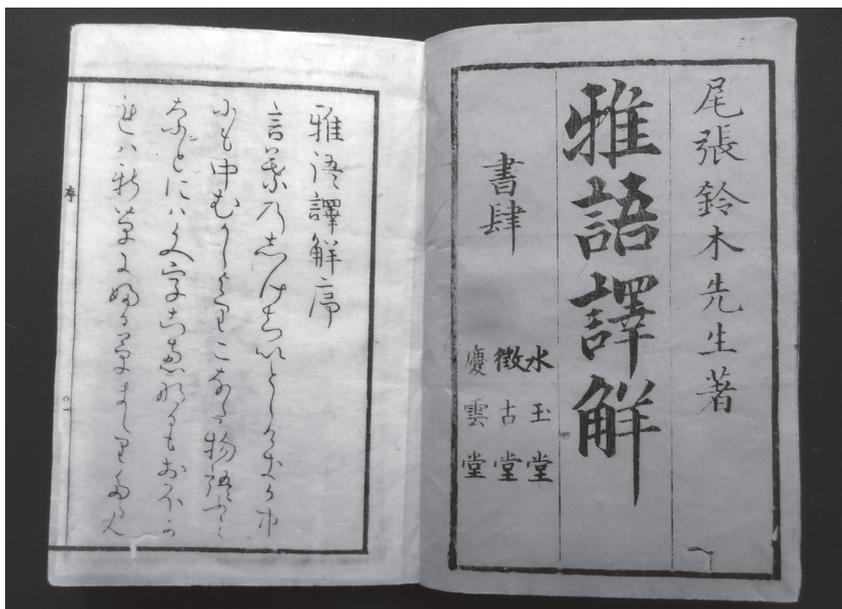
【写真2】 文政三年板（見返し・序）



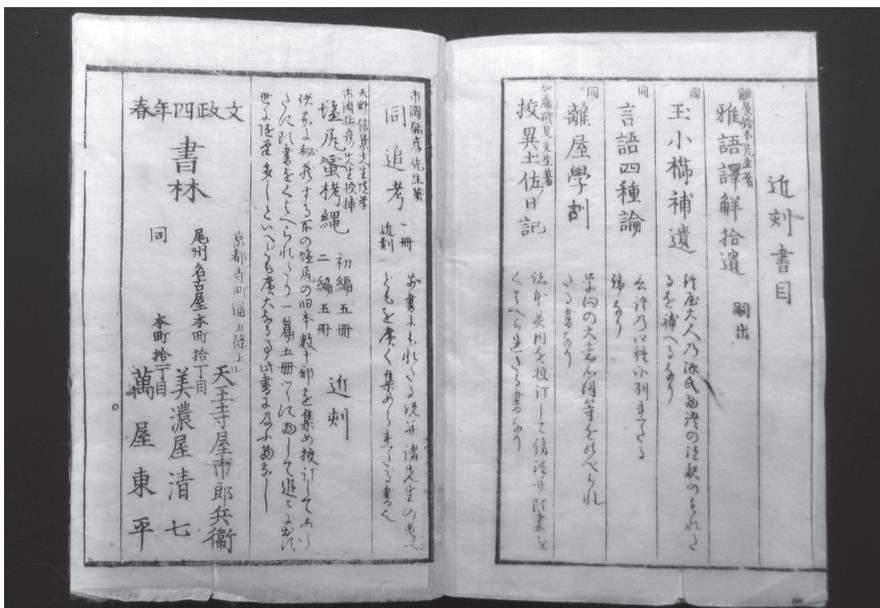
【写真3】文政三年板（一丁ウ・二丁オ）



【写真4】文政三年板（近刻書目・奥付）



【写真5】文政四年板（見返し・序）



【写真6】文政四年板（近刻書目・奥付）